「元初まりの話」に登場する動物たち（39　最終回）

「元初まりの話」と進化論

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

本シリーズの初回冒頭で、以下のように述べた。

「元初まりの話」は、人間世界創造の話であるとともに、人間救済のために明らかにされた真実の話でもある。この話にはさまざまな水域棲の動物たちが比喩的に登場する。それらは現存する動物であったり、想像上の動物であったりするが、そのこと自体は特に問題ではない。

ただ、親神による十全の守護と「元初まりの話」に登場する個々の動物との間に、どのような関係があるのか、とくになぜ教祖は私たちに特定の動物たちを示されたのか、なぜこの動物なのかなど、これまで比喩的に示された動物たちの視点からの研究・論考は少ない。

ここで述べたように、本シリーズでは、親神による「十全の守護」と、比喩的に登場した動物たちとの関連性、蓋然性について、詳しく紹介してきた。とくに、それらの動物たちに対する認識と存在感が、「十全の守護」の理解に役立てられるものであることを示した。

そこで、特定動物の同定を、主に幕末から明治にかけて広く庶民に読まれていた当時の百科事典、『和漢三才図会』（東洋文庫版）に基づいて具体的に明らかにした。

この『図会』の「巻第五十二　蟲（虫）部」の説明の最初に、「蟲〔音は仲（チュウ）〕とは生物の微少なもので、その種類は大へん多い」と書かれている。これは、蟲は小型動物を指している、ということになる。

安政３年、飯室昌栩（いいむろまさのぶ）は、日本で最初に「蟲」類を体系的に分類した『蟲譜図説』を著した。彼は「蟲」を「卵生蟲類」「化生蟲類」「湿生蟲類」「鱗蟲類」の４つに分け、狭義の「蟲」を表す昆虫だけでなく、広義の「蟲」すなわち両生類、爬虫類など900種以上を『図説』の中に収録した。これは、幕末当時、両生類や爬虫類も「蟲」の範疇にあったことを示している。

このことは、本シリーズに登場する10種の水域性生物（前号の図を参照）のうち、「大蛇」「大龍」を除く８種は、すべて広義の「蟲」の範疇に入ることを示している。「しやち」（鯱）や、「しやち」の「骨つっぱりの道具」が仕込まれた「うを」（鯢）においても、「蟲」の範疇に入ることになる。これら８種の動物たちは、「人間」が創造され、「陽気ぐらし」世界へと歩み進んで行くために必要な「雛型」および「道具」であり、比喩的に選ばれたものたちである。

一方、親神は人間創造の守護を教えるため、「大龍」すなわち月様を「うを」の体内へ、「大蛇」すなわち日様を「み」の体内へ入り込ませた。このようにして、「蟲」より大きい「大龍」と「大蛇」の２種は、月日親神として私たち人間の体内へ入り込み、「十全の守護」の理を理解しやすいようにと、体内外でその機能を具体的に示してくださっている。私たちは、私自身も含めて、この「十全の守護」の理を忘れがちだが、常日頃から再考する機会を持ち続けたいものである。

ところで、『天理教教典』第三章に「人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て、又もや皆出直し、最後に、めざるが一匹だけ残つた」とある。

ここでの「人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て」は、人間は、虫（広義の「蟲」の意味）、鳥、そして畜類へと何度も世代交代を繰り返した、という意味である。

これは、およそ３億6000万年前に“陸上の住まい”を始めた両生類の段階の人間が、その後爬虫類、鳥類、哺乳類へと進化し、およそ700万年前にはチンパンジーから分化し、「めざる」として人間へと進化したことを意味している。この経緯は、私たちが学校で習ってきた脊椎動物の進化を的確に表している。

また、この「めざる」には、メスからメスへと祖先のルーツを伝える役目のミトコンドリアDNAと、人間としての姿形を次世代へ伝える役目の核DNAが、「皮つなぎの道具」として仕込まれているのではないかと考える。

いずれにおいても、このような脊椎動物の進化が「ダーウィンの進化論」として日本に紹介されたのは、東京大学に赴任したばかりのエドワード・モースによる、明治10年９月24日の講義が最初である。モースは、同年６月17日に訪日したが、同大学の動物学教授として招聘されて来たわけではない。シャミセンガイやホオズキガイなどの貝類が数多く生息する日本へ、３カ月間だけの調査・研究のために来日したのである。彼は貝類の専門家で、到着した２日後（19日）には、横浜から東京へ向かう車窓から、有名な「大森貝塚」を発見していた。

一方、同年４月に創立したばかりの東京大学は、動物学教授が決まっていなかったこともあって、東京に着いたばかりのモースに教授就任の申し出をおこなった。そして快諾を得て、７月12日にはモースと２年間の契約を交わした。最初の授業が、件の進化論の講義だったのである。

「人間もサルの仲間」という進化論の講義は、学生たちには刺激的で、翌明治11年６月30日には、学内だけでなく学外でも進化論講義が開催されるほど、一般社会からの期待も大きかった。「自然選択」「適者生存」「弱肉強食」といった考え方は斬新で新鮮であったことから、学生だけでなく一般社会にも受け入れられたのである。ただ、進化論を受け入れられないキリスト教の宣教師たちは眉をひそめ、反論することもあったようである（ジョン・セイヤー、守屋毅ほか『モースの贈り物　甦る100年前の日本』小学館、1997年）。

既述したように、日本で最初に進化論が講義されたのは、明治10年９月24日である。しかし、天理教の３原典の一つ、「おふでさき」の第６号に「元初まりの話」が登場したのは、明治７年12月以降のことである。

それまで聞いたこともなかった「進化論」の基本的な考えが、モースによって明かされる数年前、すでに「おふでさき」には、別の視点からであったとしても、進化の話が示されていた事実は、生物学徒の末席に座する者としても、目から鱗なのである。

一般的に考えても、「大和の片田舎に住む77歳の老女が、なぜ、脊椎動物の進化を知っていたのか？」、しかも「なぜ、モースよりも早くそのことを知り、文字として残していたのか？」という不可思議さは否めない。ただ、日本の「進化論史」研究からみても、その事実は驚愕に値することだけは確かである。

このことは、教祖・中山みきが人知を超えた存在者であることを裏付ける確かな証左だと、私は誇らしく思っている。（完）